

同和教育の基礎基本～同和教育の解消は教師にかかっている～2010.12.18 元気塾仲島正教

同和教育の基本とは・・・東井義雄

私は、同和教育の仕事は差別を受けてこられたみなさんを何とかしてあげる、そんな問題よりも、もっとも根本的な問題は長い間差別の底で泣いてこられ、今もお泣き続けていらっしゃる方々がいっぱいいることを知りながら、それに対していっこうに私の胸は痛まなかった、そういう人でなしの私を見きわめ、私自身の胸の痛みの感覚を回復し、私自身をもう少し人間らしい痛みを痛みとして感じることでできる人間に変革していくこと、これを同和教育の基本と考えてきました。

よき日のために（※水平社創立趣意書の言葉） 私たちが今すべき事は・・・

1. 同和教育の原点は部落差別をなくすこと ノリキ、ユウジ、チェシルたちのため
2. 同和教育で学んだことは？ 一番厳しい子を大切にすること 人と人との温かいつながりと感動
3. 誰が差別を残しているのか？ それは大人、そして教師かもしれない
4. 教師自身が自分の胸に手をあてて考えてみる 自分も差別者ではないか
5. 同和教育の営みとは そんな弱い心を持った自分を、人間らしい心に戻していくこと
6. 同和教育は人間を育てるもの つながり、感動、温もり、愛、優しさ・・・そして幸せを生む
7. 今一度 勉強しておきたい「同和教育」のこと「同和教育問題」のこと ～用語と解説～
 - ・同和教育の歴史 ・水平社宣言（人の世に熱あれ、人間に光あれ） ・西光万吉 ・同対審答申
 - ・同和对策事業の法律（同和对策事業特別措置法1969～、地域改善対策特別措置法1982～
地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律 1987～2002.3 失効）
 - ・狭山裁判 ・解放学級 ・識字学級 ・同推教員 ・全同教 ・同和地区 ・部落史の見直し
 - ・逆差別 ・寝た子を起すな ・差別のばらまき ・部落地名総監 ・解放同盟/全解連/同和会
 - ・結婚差別 ・落書き ・全国統一応募用紙 ・教科書無償化 ・オールロマンズ事件・八鹿高校
 - ・今日も机にあの子がいない ・差別の現実深く学ぶ ・堀井隆水/氷山の一角論 ・3領域 等
8. 人権教育と同和教育は違うのか、同じなのか？ 人権教育になって「同和」はなくなったのか？
 - ・同和教育問題はまだ解決していない→だから同和教育の推進力を高めようと登場したのが人権教育
 - ・人権教育のねらいは同和教育のねらいでもある。つまり同和教育＝人権教育と考えてもよい
 - ・人権課題（女性、子ども、高齢者、障害のある人、同和教育問題、外国人、ネット被害、その他）
 - ・卒業までに、必ず「同和教育問題」の学習もすること。 同和を避ける教師がいるのも悲しい現実
9. 人権教育と道徳教育との関係は？ 同時達成を目指すもの
 - ・同和と道徳は、昔は「犬猿の仲」。でも今は違う。二つは同時達成する仲間である。
 - ・学校教育の中では、二つは重なり合う部分が多いというか、ほぼ一緒だと考えてよいだろう。
 - ・社会に出てからは、道徳はマナーで支えられ、人権は法律で守られる、という分け方になる。
 - ・でも二つが決定的に違うのは、道徳で命は落とさないが、人権では命を落とすことがある。人権・同和教育は「命を守る教育」ともいえるのだ。結婚差別や人権侵害で自殺の悲劇。
10. 「ムラ」の子の一番の課題は、学力をつけ、進路の保障をすること。
 - ・なんやかんや言うても、学力をつけることは最重要課題。それによって進路は広がる。学力とは狭い意味での「学力テスト」の点数を上げること。試験ができないと次に進めない現実がある。
 - ・自学自習の習慣をつける。家庭学習ができる環境を家族に協力してもらう。家庭の文化を変える。
 - ・あの子ならこれぐらいで十分というような低い目標設定が成長を妨げる。ムラの子も必ずできるのだ。いいモデルをつくり、見せる。必ず伸びていく。 ※一度は同和校に勤務してほしい。

11. 学級づくりも授業づくりも人権教育そのもの。

- ・地区の子と地区外の子をどうつなげていくか。「つながりと感動」が人権教育の原点になる。
- ・「俺は差別を許さない！」という地区外の子どもの活躍に、この教育の活路が見出される。

12. 忘れられない「ムラ」の子の言葉。 ここから私たち教師は何を学ぶのか

ユウジ「なんで俺らばかりががんばらあかんのや。がんばらなあかんのは差別する方やろ」

ムネナリの母「人間を変えるのは教育しかありません」チェシル「憂いのある人には百の愛を！」

ムラの子の友達シンイチ「差別をなくす方法は、つながること、そして相手を尊敬すること」

卒業式答辞「私たちはこの学校が大好きです。人としての強さやとびっきりの優しさがあるから」

西宮中学校 第18期生卒業式 答辞より一部抜粋 (学校名は仮名)

多くの人が入学前からいっていた「西宮中は怖い」という不安は、18期生のみんなと温かい先生方に囲まれて、いつの間にやら消え去っていきました。それよりも「人に対する見方」が変わっていったと思います。人を見かけで判断しなくなったことです。西宮中で学んだことは、ほかにもいくつかあります。

その2つ目は「人を思いやる心」です。週1時間の道徳同和学習をはじめ、それ以外の場での先生方の日常的な言葉から「いかに1人の人間として、何を大切にすべきか」を学んできました。にもかかわらず、心の揺れをどうすることもできず、いつしか髪の毛を染め、自らを傷つけ、授業を抜け出してしまう仲間もいました。しかし、私達はそんな仲間を見捨てることはしませんでした。「みんな授業に入ろう」と、どこまでも追いかけていきました。そんな仲間を思う気持ちは、ともすれば集団から、はずれがちな仲間も次第に髪を黒くし、授業にもだんだんと戻ってきました。

3つ目は「いろいろな人と話し合うことの大切さ」です。いろいろな人の「自分とは異なる意見」を聞くことによって、自分の考えも変わっていくし、視野も広がっていくからです。私達の学年目標である「互いに個性を認め合い、一人ひとりに輝きを」を合い言葉として、それぞれが自分への新しい発見に挑戦し、自分の得意をみつけられた仲間も多かったように思います。どんな人でも長所と短所があり、それを認め合い「人として尊重することの大切さ」も学びました。そして今、私達は1人で生きているのではなくて、必ず友だちに助けられながら、支えてもらいながら、生きているということも忘れてはいけないと思います。何よりもけっして仲間はずれがなかった18期生と母校「西宮中」は、ダイヤの原石のように私達を美しく磨いてくれた学校でした。そこを卒業できることを誇りに思います。誰にどんなふうに思われようと、私達はこの「西宮中」が大好きです。後輩のみなさんも、世間の中傷や偏見に負けずに、自分の通っている「西宮中」を大事にしてください。「西宮中」はどこにも負けない「人としての強さ」や「とびっきりの優しさ」に巡り合える所だからです。

(1998.3.13)